



Title	篆隸万象名義の研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	李, 媛
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12517号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/65754
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Li_Yuan_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 李 媛

学位論文題名 篆隸万象名義の研究

本研究は、日本の平安初期に編纂された漢字字書である『篆隸万象名義』を中心にして、文字学と情報処理学との二つの観点から本文解読へアプローチする古辞書の研究である。

『篆隸万象名義』は、9世紀前半、唐から日本に戻った弘法大師空海が、梁・顧野王撰述の原本『玉篇』を抜粋した字書である。約16,000字の掲出字に対して、字音・字義・字体の記述を収録する。原本『玉篇』は、後の時代の日本古辞書編纂に大きな影響を与えたが、現在では逸書となっており、日本に八分の一しか残存しない。ゆえに、『篆隸万象名義』は、原本『玉篇』を再構するための重要な資料であると同時に、日本語学においても字音・字訓・字体の成立・変遷を考察する基礎資料となる。しかし、『篆隸万象名義』は永久二年（1114）に書写された高山寺本しか存せず、加えて誤写・誤脱が多いことが早くから指摘されており、利用するには精密な本文校訂が要求される。

『篆隸万象名義』の解読・本文研究を行うには、次の通りの三方面の資料、情報、研究成果を整合する必要がある。

- A 関連資料群の内容
- B 『篆隸万象名義』の構造・部首体系・内容
- C 先行研究の成果

その際、課題となるのは適切な研究方法の選択である。

従来型の古辞書研究は、書誌・校勘学による伝統的な文字学の手法に則ることが多く、情報学からのアプローチが少ない。従来の研究方法では、特定の内容（例えば、字音に関する説明の部分など）の抽出が難しく、追調査が困難になることがあった。情報学の知見は、こういった難点を克服する上で大きな役割を果たす。一方で、古辞書研究である以上、第一次資料を蒐集・確認するには、文字学的な手法によるほかはない。よって、従来型の方法論で、研究資料を確保、解読した上で、情報処理学の観点から内容の整理、データの分析を行うべきである。文字学と情報処理学からのアプローチを組み合わせることが重要である。したがって、本研究ではこの二種の研究方法を総合して、『篆隸万象名義』の本文研究に取り組む。具体的な成果は次のとおりである。

第1章は、文字学と情報処理学との二つの観点から、本研究の研究対象とする玉篇系字書（原本『玉篇』・『篆隸万象名義』・宋本『玉篇』）に関する主な研究成果をまとめたものである。

第2章は、まず筆者の所属研究室で目下推進中の平安時代漢字字書総合データベース（HDIC）について概要を記し、本研究で扱った篆隸万象名義データベースはその一環に位置付けられることを示した。次に、『篆隸万象名義』と原本『玉篇』残巻との対応部首を確認し、その部分を中心に、データベース構築におけるUnicode対応、包摂問題、翻刻方針の詳細を検討した。最後に、研究目的に応じたテキストデータの活用方法について、つまり情報処理学的な研究方法を述べた。具体的には、単漢字レベルの検索に関する例と漢字部品レベルの検索に関する例をそれぞれ取り上げた。

第3章は、高山寺本『篆隸万象名義』の原本調査と近世写本の調査に基づき、書誌情報と本文内容について検討した。まず、高山寺本六帖における押界について調査結果を報告し、従来の研究を修正した。次に、高山寺本と近世写本との比較対照によって、「第一帖・巻第十一・頁部」における錯簡の問題を指摘した。さらに実例を挙げながら、近世写本を利用した本文研究の結果を述べた。最後には、近世写本の研究資料としての価値の高さに言及した。

第4章は、主に『篆隸万象名義』の項目の記述構造に着目し、埋字と脱字を整理することによって、隸書掲出字以外に、注文レベルにかつて存在した可能性のある掲出字と脱落したと考えられる掲出字を考察した。本来『篆隸万象名義』の掲出字数を想定できる範囲は16,523字から16,999字であることを指摘した。

第5章では、掲出字の相互関係を考えるため、篆隸万象名義データベースを利用して字体と字種との区別から『篆隸万象名義』における重出字を考察した。電子化した古辞書の本文データを研究目的に応じていかに利用するかその一つの試みとして、重出字を抽出した調査・分析を行い、その方法論がデータの処理や問題点の抽出などにおいて有効であることを示した。結果、『篆隸万象名義』の全体で重出字は224組448字であることを明らかにした。さらに、第五帖は体裁や反切用字などの先行研究において指摘された点において特殊であるだけでなく、重出字から見ても特殊であることを指摘した。そして最後は、重出字の成因が、多音字と類形同字の分項にあることを突き止めた。

第6章では、篆隸万象名義データベースを利用して、諸家の先行研究における高山寺本『篆隸万象名義』の掲出字解読結果を照合し(原本『玉篇』残巻対応部分2,087字) 諸家の認定に相違がある掲出字を考察した。相違は254字で、全体の1割強であった。この254字を、包摂できるもの、異体字関係のもの、別字と衝突するもの、難読字を別の通行字体で翻刻したものの4種に分類した。最後に、これらの掲出字を段階的に翻刻表現するために、守岡智彦氏によるCHISEシステムの多粒度漢字構造モデルに合わせた、データベースにおける掲出字翻刻表現階層の設計を提言した。

第7章は、日本平安初期に撰述した仏典音義『大乘理趣六波羅蜜經釈文』を利用して、『篆隸万象名義』の本文研究を行った。『大乘理趣六波羅蜜經釈文』に存する『玉篇』逸文は、『玉篇』の全30巻にわたって108個の部首に属することを明らかにした。逸文の項目と『玉篇』残巻との比較を通して、最も一般的な引用形式は、『玉篇』内容の一部を取り、出典を明記するものであることを明らかにした。最後には、この逸文の利用が『篆隸万象名義』の本文校訂に有効であることを実例で示した。

第8章においては、Unicodeによる篆隸万象名義データベースの構築、全文テキストおよび公開システムについて論じた。特に古辞書研究と文字情報処理の上で扱いやすいTSVデータフォーマットで全文テキストを提供し、利用する際に必要になるデータインフォメーションについて解説した。

以上、文字学的な研究方法を用い、『篆隸万象名義』の研究に関連する資料蒐集し、書誌調査によって、基本情報の確認・記述を行った。本文校勘により、本文研究へアプローチした。情報処理学的な研究方法を用い、データベースの設計、包摂問題、翻刻方針、データ分析、プレーンテキストの工夫等を検討した。本研究において文字学的な研究方法と情報学的研究方法との融合に大きな実りをもたらすことを示した。